



CLT理論に基づく指導法の体験習得を目指して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大学英語教育学会 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊勢野, 薫, Ise, Kaoru メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5147

9月6日(木) 実践報告1 第5室(9521)

分野/Field: Teacher education, TEFL Pedagogy

英語科教育演習

—CLT 理論に基づく指導法の体験習得を目指して—

Pedagogy of TEFL

—Experiential Learning of Teaching Techniques Based on

Communicative Language Teaching Principles—

伊勢野 薫(宮崎大学)

「人は特別な訓練を受けない限り、自分の教えられたように教える」という、発表者の信念から、英語科教育法の授業では、教授法の歴史的変遷と理念を学習し、それぞれの指導法やアプローチに特有の学習者観と言語観を体験習得させることで、将来自分で授業デザインができるようになることを目標としている。

この実践報告では、中学・高校の英語教員と初等教育の教員を目指す学生を対象とした英語科教育演習の授業で、Communicative Language Teaching (以下 CLT) 理論に基づく指導法を体験学習させる事例を紹介する。この講義のシラバスでは目標として次の2点を挙げている。

- 1 この講義では英語科教育演習 III に引き続いて、CLT 理論に基づく英語教授法の体験習得を目指す。
- 2 質問紙法、集団討論、および模擬授業を録画した DVD を使用したリフレクション(授業の振り返り方法、内省的授業省察)の体験習得を目指す。

15回の講義を3期に分け、第1期では Classic Communicative Language Teaching (CCLT)、第2期では Content-Based Instruction (CBI)、第3期では協働学習(Cooperative Learning)を用いた Task-Based Instruction (TBI)を体験習得することを目指す。講義の概要を次の表に示す。

	講義内容
1回目	指導法の理論的根拠を学習し、その指導法でその理論がどのように実践されるか、またその指導法の依拠する言語観と学習者観を理解させる。
2回目	教師によるモデル授業を実際に体験し、それをリフレクションとディスカッションを通して自分の言葉で語らせる。
3回目	個人またはグループで peer teaching 用の指導案を作成する。
4回目	個人またはグループで peer teaching を実践する
5回目	集団討論とリフレクション・レポートを作成する。

第1期 Classic Communicative Language Teaching (CCLT)

CCLTは、“Learn to communicate by communicating.”という原則にあるように、ある言語を使用することでその言語を習得させることを目標とする。そこでコミュニケーションをしなければならないような状況を作り出すために、インフォメーション・ギャップのある教材を別々に持たせて情報差を埋めるためにコミュニケーションをさせたり、できるだけ実際にあるような状況を設定して役割演技による議論をさせたりする。また言語が果たす機能や言語で表現される概念に焦点を当てて、役割演技や議論をする活動もCCLTでよく使用される。

この講義では、インフォメーション・ギャップを取り扱った。どのような教材を作成すれば、学習者にとって *meaningful/purposeful* な活動になるかに留意させ、CCLT理論にそった活動を取り入れた *peer teaching* を実施し、質問紙法による授業評価を行った。

第2期 Content-Based Instruction (CBI)

CCLTの目標が言語の技能習得であるのに対し、CBIではある言語を使用して、ある教科内容を学習しながら同時に言語も習得させようとするものである。もとはある特定の職業集団や特定の目的を持つ学習者にむけた *English for Specific Purposes (ESP)* という指導法から発展したものである。母語以外の言語を使用して知識を獲得するという認知活動は言語習得を促進するものであり、今後日本の教育現場にも普及していくと考えられる教授法である。

この講義では *content* を「異文化接触におけるコンフリクト・マネジメント」にした。これは教師に求められる教育力には、教室の各児童・生徒の持つ個人的なストーリーを一つの文化として捕らえる視点が必要であるとの発表者の信念に沿うものである。受講者は教師の異文化接触事例と解決法のプレゼンテーションを体験し、各自がそれぞれ異なった事例の15分間のプレゼンテーションを行い、それをビデオ録画したものでリフレクションの訓練をした。

第3期 協働学習(Cooperative Learning)を用いた Task-Based Instruction (TBI)

TBIはCBIから発展したものである。原則は変わらないが、タスクという具体的な目標を達成させるという特徴があり、初等教育から高等教育まで幅広く使用されている教授法である。また言語教育にとどまらず、幅広い教科で導入され、効果を挙げている教授法である。この講義ではさらに協働学習理論に基づく活動を取り入れたTBIを実践することで、受講者が「学習共同体意識」を実感し、学習者の情意面への配慮の重要性を認識することも目標とした。

受講生は3人のグループに分かれ、共同体意識を高めるためのグループ活動を体験させた。次にそれぞれのグループが異なった異文化接触事例を寸劇にし、聴衆が異文化接触における摩擦の原因を理解できるという課題に挑戦した。各グループで小道具係り、シナリオ係り、振り付け係りなどの役割分担をし、各グループ約10分の寸劇を上演した。その後集団討論形式でよかった点と良くなかった点を検討し、改善策を模索した。

(使用テキスト及び参考資料)

Cusher, K. & Brislin, R.W. 1996. *Intercultural Interactions: A Practical Guide*. Sage Pub.

Larsen-Freeman D. 2000. *Techniques and Principles in Language Teaching*. Oxford Univ. Press

Leaver, L. L & Willis J.R. (eds.) 2004. *Task-Based Instruction in Foreign Language Education*. Georgetown Univ. Press

Richard J.C. “Communicative Language Teaching Today”. (Date not defined)

<http://www.professorjackrichards.com/pdfs/communicative-language-teaching-today-v2.pdf>